

4. Homely society – 1970 年代の「中世英文学談話会」 河崎 征俊（駒澤大学教授）

「中世英文学談話会」は、1955 年明治学院大学で開かれた第 1 回例会における繁尾久氏の研究発表を皮切りに、それから 10 年後の『中世英文学談話会報』の発行を経て多くの中世研究者を育みながら、1984 年には、関西の「中世英文学研究会」と合流して「日本中世英語英文学会」へと発展してゆくことになるわけだが、発足以来 1970 年代前半までは、その規模は決して大きいものとはいえなかった。にもかかわらず、会の雰囲気は温かさそのものであった。えてして学問の専攻分野が細分化すればするほど研究資料は乏しくなるものだが、そうした環境の中であって、研究者個々人が互いに独自の研究を進めながら海外の情報を交換し得たことは、今から思えば、極めて希有な、普通では味わうことのできない貴重な体験だったと思う。それが可能だったのは、一方において、各研究者たちがそれぞれの情報を持ち合ってオープンな形で互いに研究内容を共有し合うといったように、「談話会」が、いわば、“homely”—ちなみにこの言葉は“friendly”という言葉と隣り合わせになっているといわれている—なるものによって支えられていたからであろう。また、他方において、一般的に語学の研究と文学の研究はややもすると相容れないものになる傾きがあるといわれているが、これら両者が互いに歩み寄り、刺激し合っていたからであろう。

Society という言葉には、もともと、「おつき合い」とか「社交」といった意味が含まれるが、「談話会」の雰囲気はまさにそれであった。年齢とかスクール等といった枠にとらわれることなく、そうした homely な状態が自然発生的に生み出され、続いていたようである。そのような「談話会」の一端を紹介するために、ここでは、まず、1972 年 7 月 15 日に東京教育大学（現筑波大学）で開かれた第 8 回中世英文学談話会の様子とそのとき受けた印象を回想しながら、1970 年代の「談話会」の状況について触れてみることにしたい。その日は雨が降りしきる梅雨冷えのする土曜日であった。雨のため出足が鈍っているように感じられたものの、いつ間にか 40 名程の人たちが集まってきて例会は午後 1 時 30 分から無事開始され、4 つの研究発表が行われた。文学関係では、繁尾久氏の司会により、筆者（「Pearl 試論—夢と光をめぐって」）、高宮利行氏（「Malory の“Tale of Gareth”—その構成と意味」）、及び春田節子氏（「Griselda 物語のテーマをめぐって」）の研究発表が、また語学関係では、広瀬泰三氏の司会により、藤原保明氏（*Floriz & Blauncheflure* の韻律について）と小野茂氏（「中英語研究における諸問題」）の研究発表がそれぞれ行われ、質疑応答や意見交換も時間的に制約されずに自由に行われていたようであるが、Malory 文学や Chaucer の *Griselda* 物語に関する話もさることながら、筆者の心に残ったのは、特に、小野氏の研究発表であった。「過去の言葉の理解には言葉以外の知識が不可欠である」とか「文学作品の場合、その内容の理解なくしてその言葉の十分な理解は難しい」といった内容の言葉が耳に入ってきたからである。例えば、Chaucer の *The Canterbury Tales* を見れば分かるように、“will”と“shall”の用法は単なる conventional style とか realistic style といった形式面だけで画一的かつ数字的に解明することはできないのは誰も知るところであるが、その意味

をとらえるには、文学作品の内容を理解しなければならないし、言葉以外のものの知識が求められるからだ。このとき小野氏が話の結びとして述べた言葉は、第21回の例会で池上忠弘氏が力説した「フランス文学の重要性」という言葉とともに、語学のみならず文学の世界を探求する者たちに、今でも、学問の基本の大切さを教えてくれているようである。その意味で、当時、氏の言葉に鮮明な驚きを感じたのである。

懇親会は地下鉄の「茗荷谷」駅近くの喫茶店の二階を借り切って行われ、出席者は25名前後。内容も *informal* そのものであった。そのため筆者は、厨川文夫氏のちょうど隣に立っていたということもあって、氏から「学問はおひとりで一步一步やるものですよ」という励ましの言葉を頂くことができた。それは望外の喜びであったと同時に、大いなる刺激と夢を与えられる出来事であった。確か、時間的余裕と精神的忍耐を要求される学問の厳しさとその創造性について教わったような気がするが、それとともに、厨川氏から学問の自由と自立性を学んだような気がしてならない。それもすべて「談話会」の *homely* な雰囲気が授けてくれた賜物であったと思う。

この第8回例会のときの会員数は108名であったが、1975年には166名、1979年には210名—ちなみに、1965年は60名、1984年は264名であった—となり、「談話会」の活動も活発化し、次第に学会的様相を帯びるようになった。*Beowulf*, *Richard Rolle*, *Ancrene Riwe*, *Langland*, *Gower*, 宗教文学, 中世演劇ならびに *Arthur* 文学等, 多岐にわたる研究発表が行われ、さらに橋口倫介氏（「十字軍クロニクラーについて」）、皆川達夫氏（「中世ヨーロッパ音楽について」）、*H. L. Rogers* 氏（“*The Style of Old English Poetry, especially Beowulf*”）及び *Dorothy Metlitzki* 氏（“*The Style of Araby in Medieval English*”）等による国内外を含めた講演会も開かれるようになり、小野氏が第8回例会で述べた「言葉以外のものの知識」の重要性が現実化することとなった。また、関西の研究会から、佐々部英男氏、黒瀬保氏、齋藤勇氏ならびに野口俊一氏たちも会に参加するようになり、「談話会」は多彩を極めるに至った。

このような「談話会」の特性は、1984年11月に発行された『談話会報』最終号（No.22）に掲載された寺澤芳雄氏の言葉を読めば分かであろうが、氏も述べているように、この種の学問分野はともすれば狭いひとりよがりの *provincialism* とか *localism* に陥り易いものである。どの学問分野についてもいえることだが、学問に足を踏み入れれば、ちょうど太陽に目を向けたときのように、誰もさらなる理想に幻惑されて、自分以外のものに目を向けなくなってしまうものである。しかしながら、1970年代の「談話会」に漂っていた雰囲気は一定の形式とか枠組を超えた純粋な学問的対話で彩られたものであった。もちろん、学問はただひとりで完全に最後まで全うし得るものでもなければ、また、単なる「社交」によって生み出されるものでもない。ある程度、組織立てられた学問的レベルに裏付けられた交流が不可避的である。だが、純粋性を維持できた「談話会」の *homely* な活動は極めて意義深いものであったと思う。＜あのとき＞があつて＜今＞があるのだ。

昨年（2004年12月）20周年を迎えた「日本中世英語英文学会」が今日まで着実に

歩み続けてこられたのも、その前身にあたる関西の「研究会」と東京の「談話会」の自由闊達な精神性がその礎としてあったからであろう。規模の大小を問わず、学会とか研究会にはこのような研究態勢が不可欠である。都留久夫氏が『談話会報』の最終号で書いているように、「談話会」にはスタートしたときから OE と ME を同じ土俵上で論じ合い、**philological approach** と **literary approach** を切り離すことなく取り入れようとする雰囲気があったようである。研究分野の細分化と研究の深化により、この伝統はややもすると薄らいでしまう傾向にあるが、例えば、市河三喜、西脇順三郎、小林淳男、厨川文夫、倉長眞、宮部菊男、藤原博、松浪有、中尾俊夫、ならびに生地竹郎諸氏といった先達たちから受け継がれたこうした精神的・学問的遺産が、その後、日本における中世英語英文学研究に生かされ、育まれてきたのは幸いである。そのような伝統に根ざした中世学が、現在、具体的な形となって現れてきていることは誰しも認めるところであろう。